



## 成果と課題

### 1 立野小学校の成果と課題

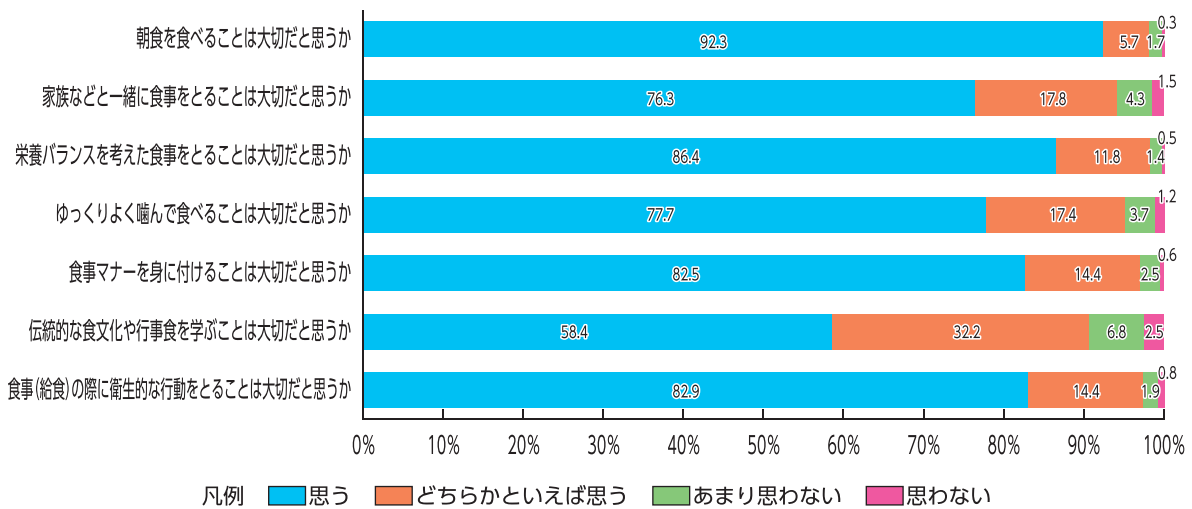
#### (1) 児童アンケート調査（事前・事後）の結果からみた取組成果

##### ① 児童の食に関する意識の調査結果

事前アンケート調査における児童の食に関する意識をみると、大切だと思うこととしては、「朝ごはんを食べること」、「栄養バランスを考えた食事をとること」、「食事マナーを身につけること」、「食事の際に衛生的な行動をとること」の割合が比較的高い。

これに対して、「家族と一緒に食事をとること」や「ゆっくりよくかんで食べること」や「伝統的な食文化や行事食を学ぶこと」を大切だと思っている割合は低かった。

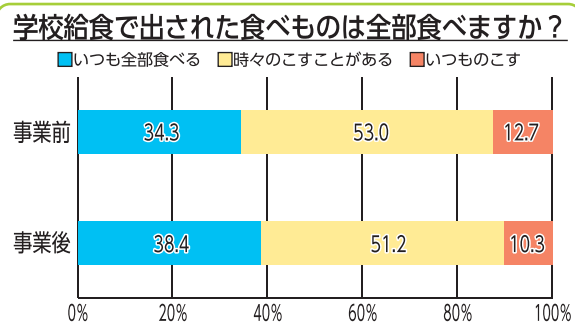
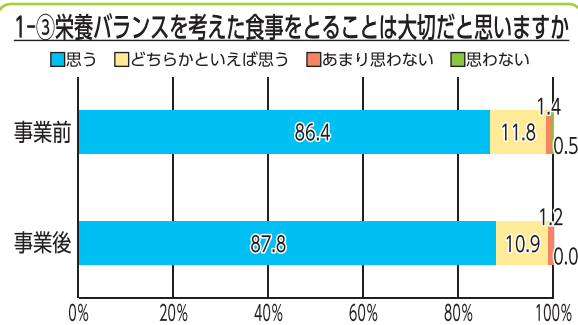
#### 事前調査 食に関する意識



事前調査では、意識調査と立野小学校の課題に準じた行動に関する調査も行った。結果は、事後と並べて報告する。今回の取組では、「バランスのよい食事を食べる児童を増やす」「食事のマナーを守って食べる児童を増やす」「給食の副菜を残さず食べる児童を増やす」を到達目標に実施したため、関係する調査項目を抽出し、以下具体的な変化について表していく。以下、左側に意識調査、右側に行動調査の結果を表している。

##### ② 研究実施後の調査結果

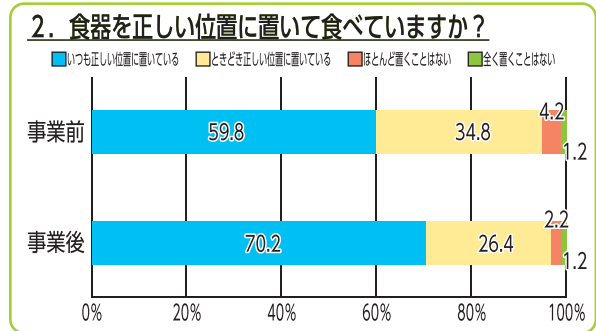
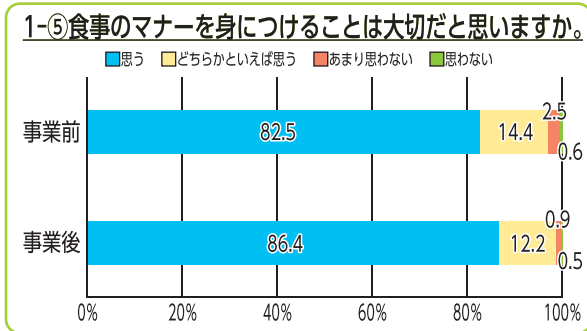
#### a 「バランスのよい食事を食べる児童を増やす」の到達目標の結果



栄養バランスについての意識調査では、大切だと「思う」と答えた児童の割合で増加（+ 1.4pt）が見られた。また、「大切だと思わない」と答えた児童は 0pt に減少した。行動調査では、給食を「いつも全部食べる」と答えた児童の割合で増加（+ 4.1pt）が見られた。また、「いつものごす」児童の割合が減少（- 2.4pt）した。

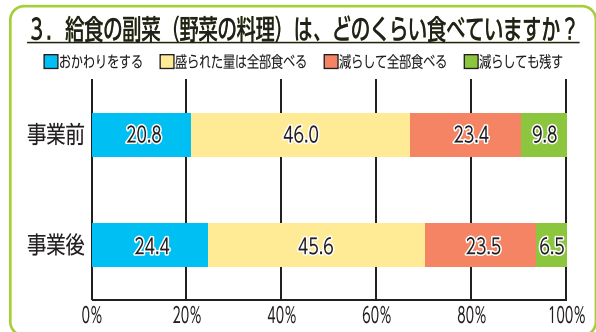
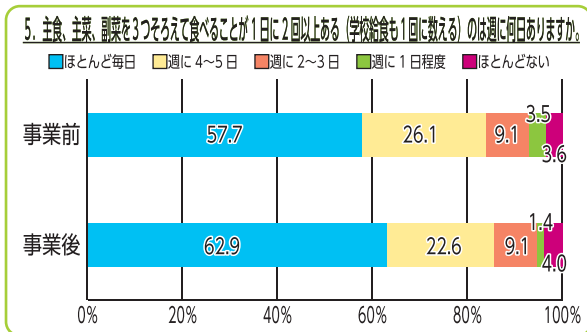


**b 「食事のマナーを守って食べる児童を増やす」の到達目標の結果**



食事のマナーについての意識調査では、大切だと「思う」と答えた児童の割合で増加（+3.9pt）が見られた。行動調査では、給食の時に食器を「いつも正しい位置に置いている」と答えた児童の割合が大きく増加（+10.4pt）した。

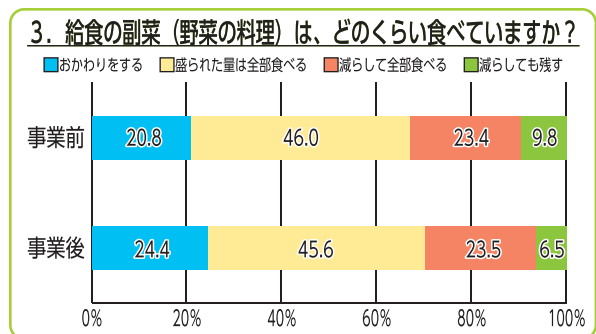
**c 「給食の副菜を残さず食べる児童を増やす」の到達目標の結果**



主食、主菜、副菜を3つそろえて食べることが「ほとんど毎日」と答えた児童の割合が増加（+5.2pt）した。行動調査では、給食の副菜をおかわりと答えた児童の割合が増加（+3.6pt）した。また、「減らしても残す」と答えた児童の割合が減少（-3.3pt）した。すべての課題で大きな変化とは言い難いが、成果の一つとして捉えるところである。

**(2) 保護者アンケート調査の結果からみた取組成果**

本事業に係る取組後の保護者アンケート調査結果から、この度の取組によって児童の食に関する意識は、高まっていると保護者に認識されていることが分かった。また、食習慣もよりよくなっていると保護者に認識されていることも分かった。本校の食育に係る取組が家庭にも伝わり、認識いただけただことは、大変大きな成果であると考えられる。



**(3) 今後の課題**

事後の食に関するアンケート調査結果から、今年度課題とした「バランスのよい食事を食べる児童を増やす」「食事のマナーを守って食べる児童を増やす」「給食の副菜を残さず食べる児童を増やす」の意識と行動の高まりが見て取れたことは、前述のとおりである。

今回の研究から見えた課題は以下の2点である。

- ①食育を通して、家庭を巻き込み、一緒に食生活の基盤を構築していくことである。情報提供は、食育だよりや給食試食会などで行っているため、次のステップとして、よりよい食生活



の基盤を学校と家庭とが一緒に作っていくことが必要であると考えた。

- ②児童が自分自身で、食を選択していく実践力を身に付けさせるような取組を続ける必要があると考えた。家庭だけに投げかけるだけではなく、児童自身に食を選択していく実践力を身に付けさせるような取組を続ける必要があると考えた。

また、この取組を行い、栄養教諭の視点から見た課題は以下の2点である。

- ①児童が中学生となることに備え、食育を栄養教諭一人で行うのではなく、校長先生を始め、教職員の連携の幅を広げていく必要があるということである。同じ方向を向いて食育を行うためにも、様々な立場の大人がつながることが何よりも大切であると考えた。これからも、栄養教諭の立場から児童たちの実態や情報を伝え、共通理解共通行動ができるよう努める必要があると感じた。
- ②実態把握をしっかりとすることにより、課題が見え、より効果的に食育を進めることができるとわかったが、通常の業務の他に、実態把握から評価まで行うことが難しい。背伸びしなくても、学校の中でできることを継続して続けられるようなシステム作りが必要だと考えた。

この度実施した研究から得た課題を次年度につなぎ、実践していくことを考えている。

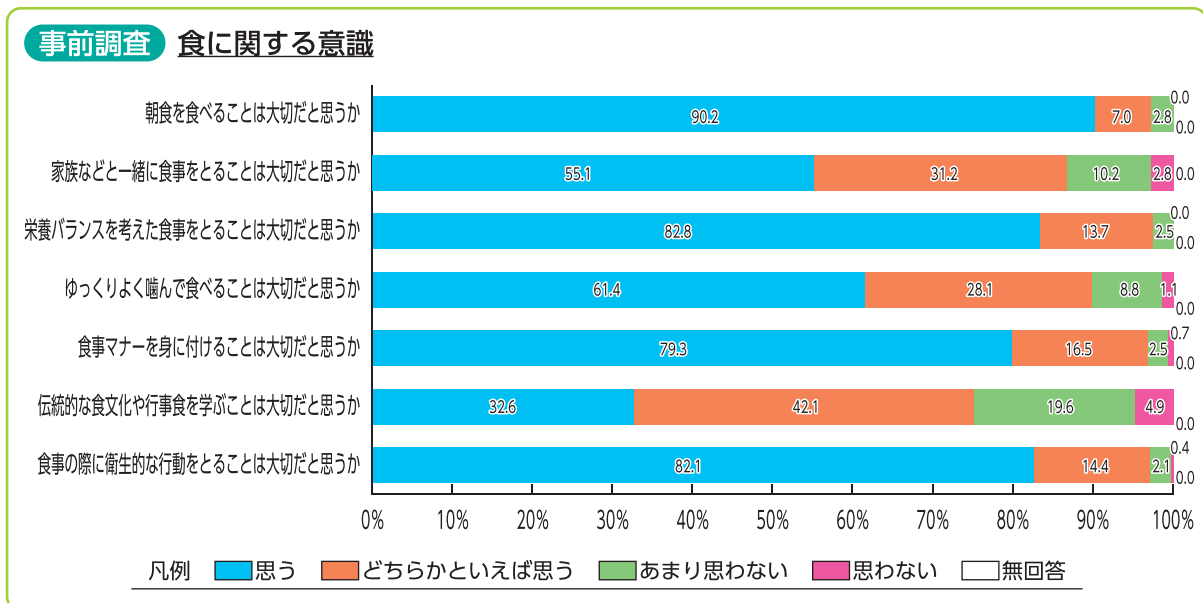
## 2 大増中学校の成果と課題

### (1) 生徒アンケート調査（事前・事後）の結果からみた取組成果

#### ① 生徒の食に関する意識の変化

事前アンケート調査における生徒の食に関する意識をみると、大切だと思うこととしては、「朝ごはんを食べること」、「栄養バランスを考えた食事をとること」、「食事マナーを身につけること」、「食事の際に衛生的な行動をとること」の割合が比較的高い。

これに対して、「家族と一緒に食事をとること」や「伝統的食文化や行事食を学ぶこと」を大切だと思っている割合は低かった。



さて、本事業に係る取組後の生徒の食に関する意識の具体的な変化について、向上が見られる事項を焦点化して以下に示す。

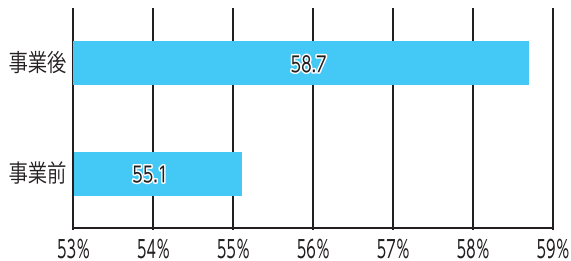
まず、大きな課題として捉えた「共食の大切さ」に関する意識の変化は次のとおり、その大切さを強く認識する生徒の割合が増加（+ 3.6 pt）した。

また、「食文化等に関して学ぶことの大切さ」を強く認識する生徒も増加（+ 4.0 pt）した。

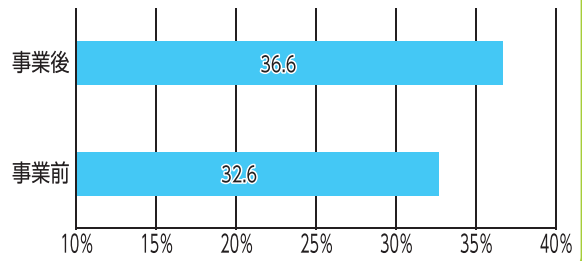


本校のこの度の実践は、事前のアンケート調査結果から捉えた最も大きな課題であったこの2点の改善を目指すものであった。したがって、この生徒の意識変化は、大きな変化とは言い難いが、成果の一つとして捉えるところである。

家族などと一緒に食事をとることは大切だと思う生徒の割合

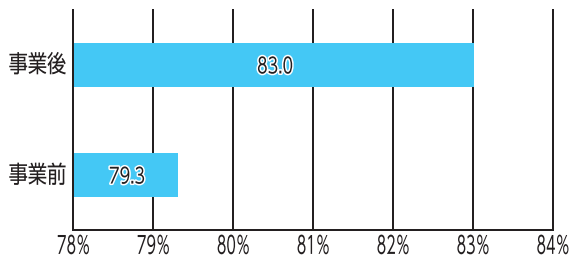


伝統的な食文化や行事食を学ぶことは大切だと思う生徒の割合

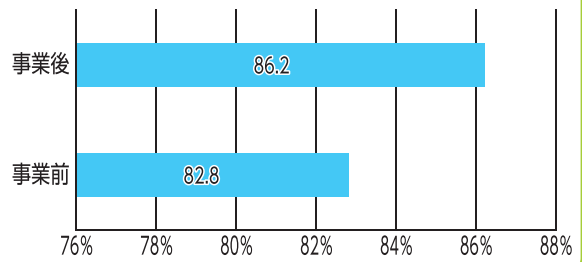


この他、「食事のマナーを身に付ける大切さ」を強く認識する生徒の割合が+ 3.7 pt、「栄養バランスのとれた食事の大切さ」を強く認識する生徒の割合が+ 3.4 pt とそれぞれ増加が見て取れた。

食事マナーを身に付けることは大切だと思う生徒の割合



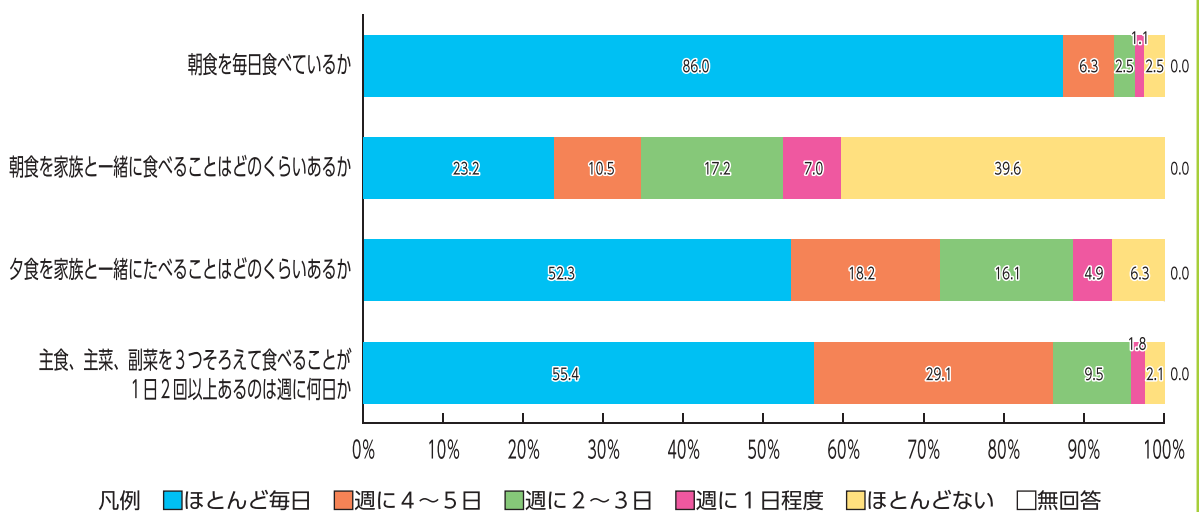
栄養バランスを考えた食事をとることは大切だと思う生徒の割合



## ② 生徒の食習慣の変化

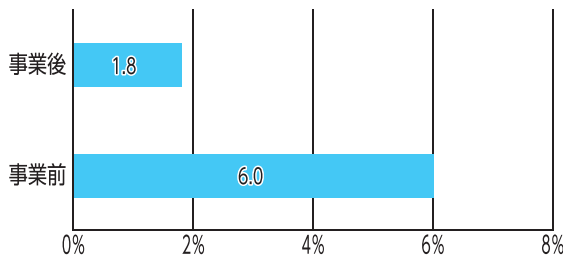
事前アンケート調査結果における生徒の食習慣をみると、「朝食を家族と一緒に食べること」について、週に2～3日程度以上の割合が5割強であった。また、「朝食を毎日食べること」について、週に1日程度以下の割合が0.4割弱であった。

### 事後調査 食習慣





## 主食、主菜、副菜を3つそろえて食べるのが週に1日以下の生徒の割合

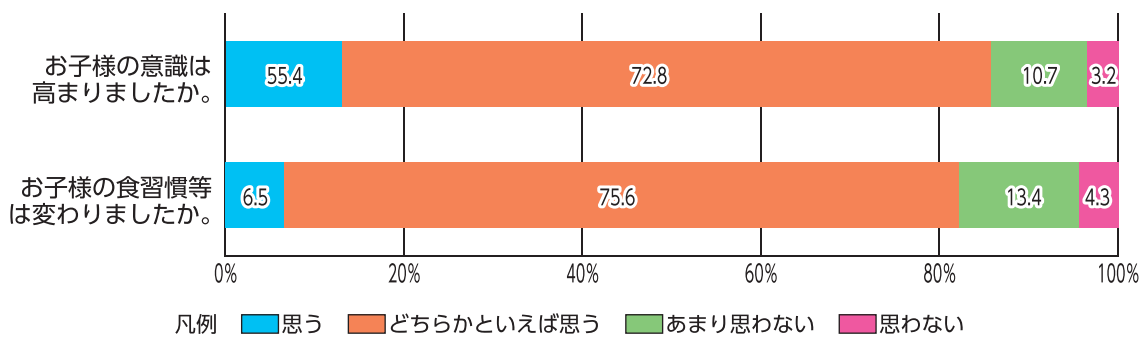


本事業の取組後のアンケート調査結果から、生徒の食習慣の改善として捉えられることとして、「主食、主菜、副菜をそろえて食べるのが週に1日以下である」生徒の割合が減少（-4.2 pt）したことがある。

## (2) 保護者アンケート調査の結果からみた取組成果

本事業に係る取組後の保護者アンケート調査結果から、この度の取組によって生徒の食に関する意識は、かなり高まっていると保護者に認識されていることが分かった。また、食習慣等もよりよく変容していると保護者に認識されていることも分かった。本校の食育に係る取組が家庭にも伝わり、生徒のよりよい変容をその効果として家庭に認識いただけたことは、たいへん大きな成果であると捉えている。

### 保護者アンケートの結果



## (3) 今後の課題

事後の生徒アンケート調査結果から、「共食が大切であること」の意識の高まりが見て取れたことは、前述のとおりである。しかし、この意識の高まりに対して、家庭における「共食の実態（習慣）」についての改善は、図られていなかった。学年によっては、低下している状況があった。

学校における取組で生徒の意識を高めることと併行して、保護者の意識啓発のための取組を一層充実、促進する必要性を痛感している。本校職員の英知と有効な外部教育資源の活用等によって、保護者の意識啓発に向けた新たな取組を講じることを次年度以降、展開することを考えたい。



## 取組の成果と課題 (第3回推進委員会より)



### 川島 規行 委員 (埼玉県学校食育研究会会長)

実態に合った指導を展開したことで児童生徒の大きな成長につながったと思います。小学校での日々の積み重ねと、中学校での生活に結びつける取組が実践力の育成につながったと思います。そして、その取組の成果を家庭に効果的に発信できていたことが、家庭とのつながりを強いものにしたと思います。



### 中島 勝男 委員 (埼玉県学校給食会常務理事事務局長)

現在の子供たちの周りには化学調味料が当たり前のように使われています。食物の本来の良さを体験する中で正しい知識を知ってもらうことができました。子供たちが大人になって、多くの食材の中から、自分に必要な食材をセレクトできる能力の育成が図られたと思います。



### 坂田 めい子 委員 (埼玉県学校栄養士研究会会長)

栄養教諭の強みは栄養における専門的な知識を、食に関する指導として実施できることだと思います。授業や毎日の給食の時間を通して、コツコツと伝えていくことは、子供たちにとって大きな積み重ねとなります。料理の工程や、その食材の元の姿を理解させることはとても効果的だと思います。



### 石川 清子 委員 (県保健医療部健康長寿課 健康増進・食育担当主査)

食育は県全体としても注目しており、中でも子供たちの世代をしっかりと育てることはとても重要なことと言えます。今回の事業のように、学校と協力して食育推進を目指す企業が増えてきています。経費をかけずに進める方法も多くあります。学校が中心となって、地元の子供たちを地元の企業の協力を得ながら育てていくシステムを作りたいと思います。



### 平澤 亜美 委員 (春日部市教育委員会学校教育部 指導課指導担当指導主事)

春日部市教育委員会という立場から見て、子供たちの食に対する意識が訪問するたびに、増していくことに驚きました。小学校で身につけた知識を中学校で実践力へと育てていきました。改めて、小中の連携の大切さを知ることができました。



### 佐藤 智代 委員 (春日部市立立野小学校校長)

今回の事業を受けるにあたり、子供たちには「興味をもたせること」「感じる事」を大切にしたいと考えていました。そのためには、知識も重要であり、仲間との体験も不可欠です。そして、立野小学校で身につけた力は、大人になっても使える能力として身につけてほしいと考え事業を始めました。今回の事業は校長一人で進めることもできなければ、栄養教諭一人で進めることもできません。

職員みんなで協力し、家庭を巻き込み、少しずつ進んできた道が、子供たちの成長として成果に表れたと思います。



### 菊野 大 委員 (春日部市立大増中学校校長)

今回の事業を通して、日ごとに子供が成長し、勢いが増すように感じました。

研究を進める中で、新たに見えてきた課題として「共食」があげられます。食育の充実には、家庭にも大きな役割があり、学校だけで進めていくことはできません。学校歯科保健活動にとっても似ていて、家庭を巻き込んで進めていくことは、非常に大きなハードルとなりました。改めて食育の重要性を感じるとともに、同時に社会の高まりも必要だと感じました。その中で、学校に何ができるのかを整理し、食育についての指導方法をシステム化・ネットワーク化することが普及のポイントになると思います。ぜひ、今回の成果も含めて、研修等の中で多く発信していきたいと思います。



### 布目 菜都美 委員 (春日部市立立野小学校 栄養教諭)

子供たちの食に関する知識は家庭での影響を強く受けています。残念ながら化学調味料の味しか知らない子供たちもいます。家庭を巻き込んで食育を展開する事が、子供たちの成長には重要だと改めて感じました。教職員に課題を提示するにも、保護者に協力を得るにも実態把握がとても重要でした。今回は研究の視点もあつたのでアンケート集計など丁寧に実態把握をしましたが、とても時間がかかるため来年度以降、通常業務の中での的確な実態把握を行うためには、何か自分なりにできる形を見つけていきたいです。研究を進めていく中で、子供たちの成長もうれしかったですが、保護者からの応援や感謝の言葉がとてうれしかったです。



### 中西 明美 委員 (女子栄養大学 准教授)

今回の事業の目的は実践モデル構築になります。実践力の育成が必要で、多くの学校で実施できるようシステム化する必要があります。ぜひ、一つ一つの取組を、誰が、いつ、どういう関りの中で実践されたのかを整理してください。そしてチーム学校として動くためにも、指標と根拠となるデータが必要です。今回の事業を研究の視点で見ると期間が短いため評価が表れにくいと思います。

もう少し長い期間行えると、より評価が明確になると思います。引き続き、食育を推進していただければと思います。



## 埼玉県成果報告研修会について

日 時 平成31年2月1日（金） 14：15～16：30

会 場 さいたま市民会館おおみや

対 象 県内公立小・中学校、県立特別支援学校の管理職及び栄養教諭・教諭（食育主任等）、市町村教育委員会の食育・学校給食担当者  
計 132 名

内 容 ・実践報告

春日部市教育委員会	指導主事	平澤 亜美 氏
春日部市立立野小学校	栄養教諭	布目菜都美 氏
春日部市立大増中学校	教 頭	中島 毅 氏
・指導講評		
女子栄養大学	准 教授	中西 明美 氏
・基調講演		
東京ガス株式会社	埼玉支社長	阿久根謙司 氏



実践報告の様子

## 基調講演の様子



### 基調講演

#### 「自立を促す食育の視点

～木の上にとってみましょう～

東京ガス株式会社

埼玉支社長 **阿久根 謙司 氏**

「自立を促すコーチング」をキーワードに、甲子園出場等の野球経験から、FC 東京社長など、自らの体験に基づく組織マネジメントについて食育の視点に触れながら、講演していただきました。





## 食育調査結果の分析

女子栄養大学 准教授 中西 明美 氏  
取組実践の指導講評より

### 1. 分析の目的

朝食を毎日食べる子どもとそうでない子どもの食生活の特徴を明らかにすることで、朝食を毎日食べることを促す方策を検討することを目的とした。

### 2. 分析対象

春日部市立立野小学校児童を対象に6月に実施した調査結果を分析した。

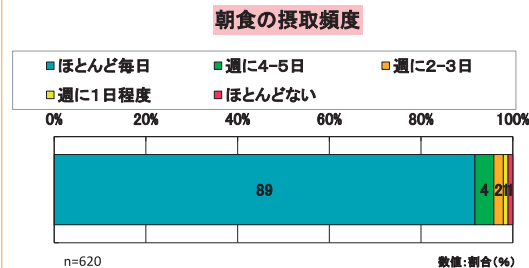
### 3. 分析項目

- 1) 文部科学省食に関するアンケート  
朝食摂取頻度、朝食共食頻度  
主食・主菜・副菜を揃えて食べる頻度
- 2) 立野小学校食育アンケート  
給食の摂取状況、給食の副菜の摂取頻度

### 4. 解析方法

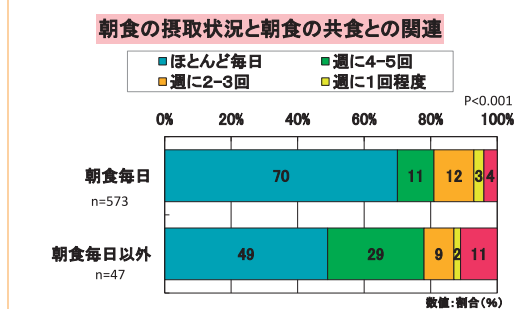
朝食を毎日食べると回答した子どもを「朝食毎日群」、朝食を食べるのは週4・5日以下と回答した子どもを、「朝食毎日以外群」として、2群間に、朝食共食頻度給食で嫌いなものが出たときの対応、給食の摂取状況に違いがないか検討した。χ<sup>2</sup>検定により分析した。

【分析事例①】



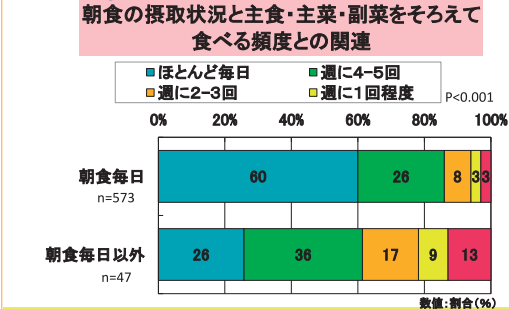
ほとんど毎日食べる子どもは573名→朝食毎日群  
週に4-5日以下の子どもは47名→朝食毎日以外群

【分析事例①】



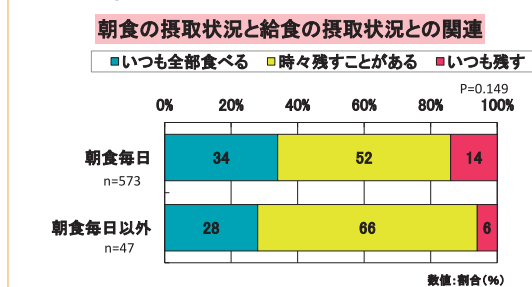
朝食を毎日食べる子どもの方が共食状況もよい。  
⇒共食することが朝食を食べることを促す。

【分析事例②】



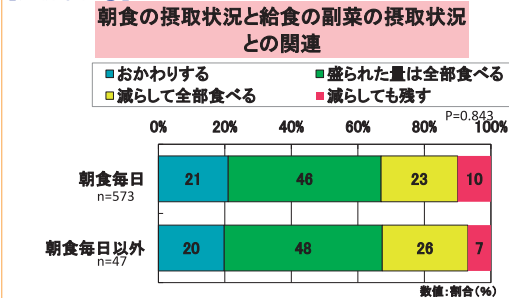
朝食を毎日食べる子どもの方が主食・主菜・副菜の揃った食事の頻度が高い⇒根拠に基づいた指導につながる。

【分析事例③】



朝食の摂取状況と給食の摂取状況は関連していなかった。  
⇒朝食欠食の子ども給食の食べ方はどうか？

【分析事例④】



朝食の摂取状況と給食の副菜の摂取状況は関連していなかった。朝食摂取と給食の副菜の摂取は別の指導が必要







平成31年2月



春日部市立立野小学校マスコット  
「たてのん」

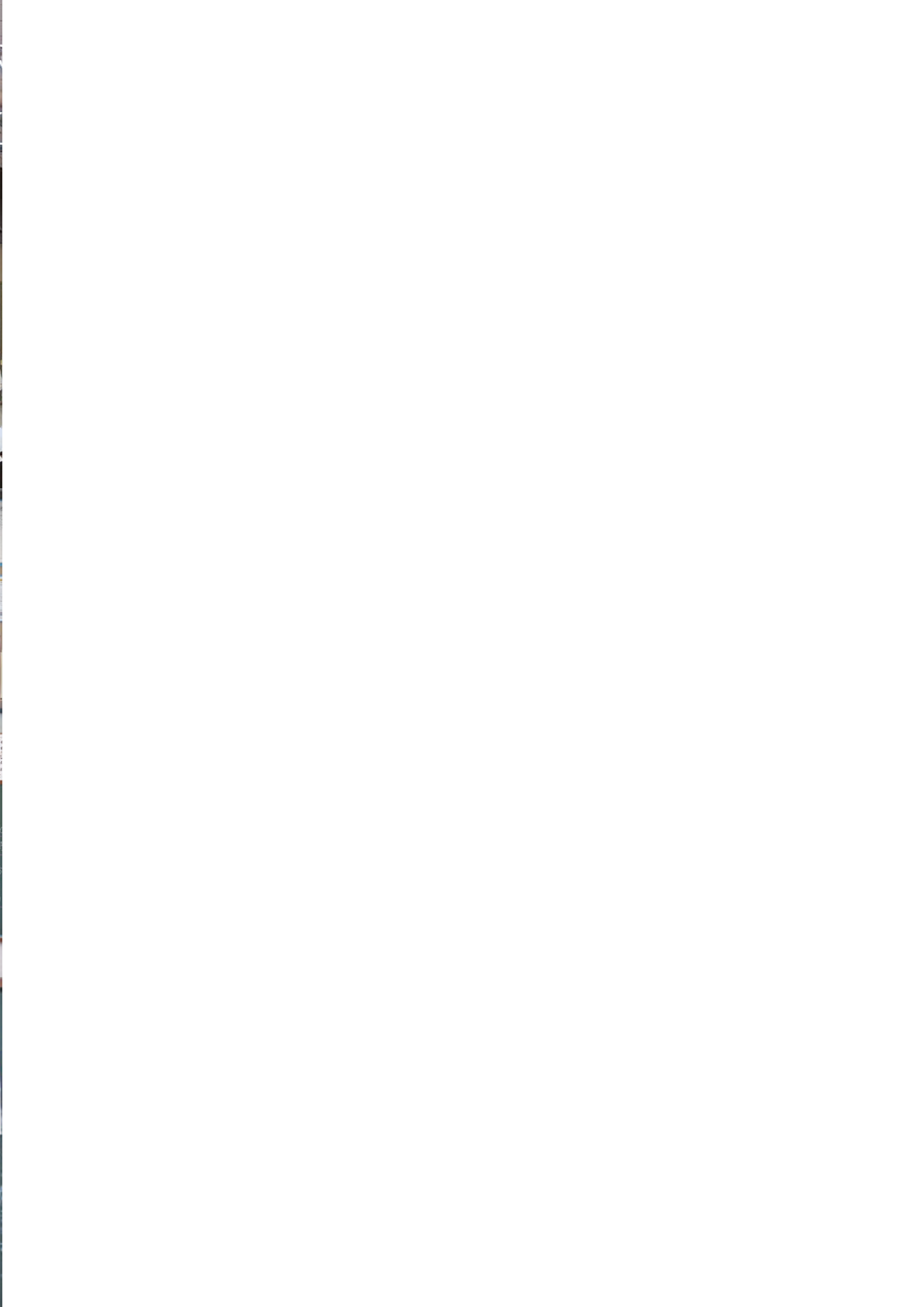
つながる食育推進事業 報告書

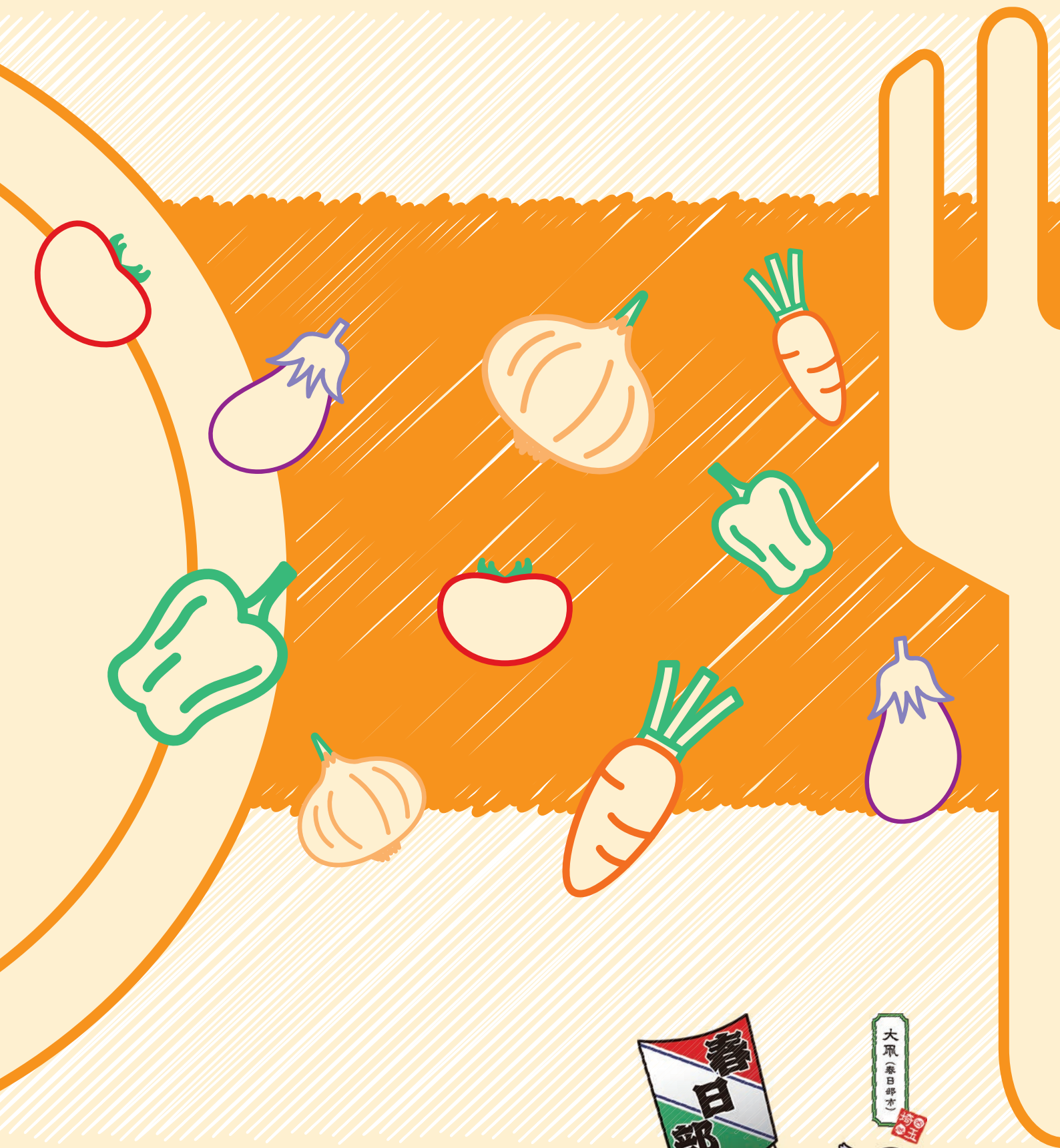
発行者 埼玉県教育局県立学校部保健体育課

〒330-9301 埼玉県さいたま市浦和区高砂 3-15-1  
TEL 048-830-6968  
FAX 048-830-4971



春日部市立大増中学校マスコット  
「マッシー」





埼玉県のマスコット  
コバトン さいたまっち